わかるトルコ政治

訳／小沢佳子　編集／ＢＢＩ編集部

「セゼル大統領とエジェヴィット首相の衝突！」連載21回

２０００年５月に内閣総立っての推薦を受け、憲法裁判長から大統領に就任したセゼル大統領は、この１年の間に国民の絶大な信頼と支持を得た。しかし、大統領と内閣との間には何度となく意見の相違が表面化し始め、緊張の空気が漂っていた。そんなところにこのニュースが爆弾のごとく破裂した！

会議で飛んだ共和国憲法冊子

二〇〇一年二月一九日月曜日午前一一時五分。それは総理大臣エジェヴィットが行った記者会見から始まった。

国家の安全保障について協議する為に月に一度開かれる国家安全保障評議会（MGK=Milli Güvenlik Kurulu）を途中で退座したエジェヴィットは、ショックを隠せない様子で「セゼル大統領はＭＧＫ会議において、あるまじき態度をとられた。」と直接大統領セゼルに向けて非難の発言した。

この表明は、爆弾のごとくトルコ全国に衝撃を与えた。そもそも、綱渡り状態であったトルコ経済は、この衝撃に耐えられるはずもなく、真っ逆さまに大混乱へ落ち込んだ。

エジェヴィットの非難発言から二時間後、株は暴落し、経済は大混乱に陥った。これは結果的に、昨年の一一月の銀行危機の約三倍の損害となった。（本誌一八頁「トルコ経済特別特集」ご参照）

ＭＧＫ会議における衝突の原因は、現在政府の重要課題とされている「不正取り締まり」に対する内閣の働きを、大統領が十分と認めていなかったことに起因する。

大統領が、銀行部門に向けて、銀行調整監視機構に加え、特別査察チームの派遣を要請したことに対し、内閣は「査察の査察が必要なのか」と反論。大統領は憲法一〇八項を挙げ、「君達は憲法も知らずに話しているようだ」と述べた。「ほう、それなら、その憲法とやらを見させてもらって、わかろうじゃないか」と割り込んできたオズカン副首相の言葉に怒ったセゼルは「ほら、読めばいい。」と共和国憲法が記された冊子を、エジェヴィット首相達の座る机に向かって、投げつけたとされている。

意見は二つに別れた。セゼル派と、エジェヴィット派。

セゼル派は、「大統領は、内閣の不正取り締まりに対する態度の甘さを指摘しただけである。大統領は国民の声を代弁しただけで非はない。」とセゼルを弁護。

エジェヴィット派は、「状況如何に関わらず、セゼルは大統領として、一国の総理大臣であるエジェヴィットに対して、あるまじき態度をとった。これは許し難いことで、内閣に対し公式に謝罪すべきである。」と主張した。

しかし残念ながら、結果的には、世論では、エジェヴィット派の歩が悪く、

各党のリーダー達

2001年４月３０日現在
DSP+MHP+ANAP 第57代連立内閣

Bülent ECEVİT
ビュレント・エジェヴィット
首相／DSP党首

DSP／デーセーペー
民主左派党
Demokratik Sol Partisi

Devlet BAHÇELİ
デヴレット・バフチェリ
副首相／MHP党首

MHP／メーヘーペー
民族主義行動党
Milliyetçi Hareket Partisi

Mesut YILMAZ
メスット・ユルマズ
ANAP党首

ANAP／アナップ
祖国党
Anavatan Partisi

Recai KUTAN
レジャイ・クタン
FP党首

FP／ファズィーレット
美徳党
Fazilet Partisi

Tansu ÇİLLER
タンス・チルレル
DYP党首

DYP／デーイェーペー
正道党
Doğru Yol Partisi

Ahmet Necdet SEZER
アフメット・ネジデット・セゼル
第10代共和国大統領
（元憲法裁判長）

為替変動制導入後のガソリンの値上げ（単位：トルコリラ）

（2001.04.05 Milliyet 紙）

トルコ国内の都市ごとによるスーパーガソリンの価格	2001年2月22日	2001年4月4日	値上率
イスタンブル・アジア側	609,800,000	862,800,000	41,5%
イスタンブル・ヨーロッパ側	611,300,000	864,800,000	41,5%
アンカラ	609,800,000	862,300,000	41,4%
イズミル	608,600,000	853,300,000	40,2%

不利な立場に追い込まれた。

というのも、元来、国家安全保障評議会は国家機密を扱う為、会議の内容及び、会議に於ける発言等は、機密。基本的には外部に発表禁止となっている。それにも関わらずエジェヴィットは、少なくとも、会議の内容を発表したことになり、まずこれで失点した。

エジェヴィットを父とも慕うオズカン副首相がMGKの会場を退席する際、セゼル大統領に対し「（我々の後押しがあって現職についたようなものなのに）恩知らずな猫（ナンキョル ケディ）め！」と発言をしたことが新聞で発表されたことも、世間を大きく騒がせた。

しかし状況はどうであれ、この衝突が引き金となったとされる今回の「二月経済大危機」の請求書の膨大さを、その時わかっていたとしたら、エジェヴィットはMGK会議を途中退席したであろうか。

予想されていた経済危機の到来とはいえ、その引き金を自ら引いてしまったエジェヴィットと連立内閣閣僚に対し、野党はここぞとばかりに、「内閣解散」の声を上げた。

DSP党首タンス・チルレルは、『国家危機』これを理解することは不可能だ。このトルコのおかれている状況はまるで火事場だ。連立内閣は解散すべきである。」と批判。

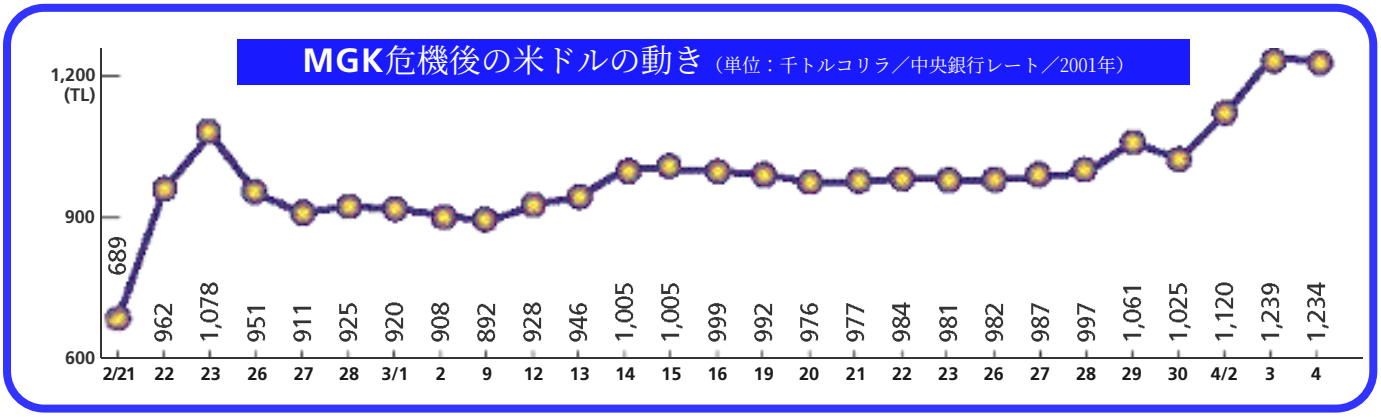
CHP（Cumhuriyet Halk Partisi）党首デニズ・バイカルは、「我々はCHP党として、全面的にセゼル大統領を支持する。聞くに大統領は、内閣が政治の不正に対し必要処置をとっていないことを指摘したそうではないか。これは正しい。世論もそう言っている。我々も同意見だ。」と述べた。

FP党首レジャイ・クタンは次のように述べた。「遺憾ながら、この件は、昨年一一月の経済危機よりも大きな危機をもたらす原因となるであろう。」まさにその通りとなった。

とにかく、ガスの充満していたところに火を近づけたようなもの。トルコ経済は大爆発し、トルコ中に火の粉をふりまいた。

共和国史上最大となった二月経済危機

翌日からドルは急騰し、あれよ、あれよという間に三日で、一気に五〇%も上がり、一ドル百万トルコリラを超えた。市場は混乱し、ドルの為替が常に変動する為、ドル価格による販売を不可能にし、終日販売が停止された（国外航空券等）。



個人商店では、即座に店のトルコリラの料金表示を書き換える店も出た。ドル立て販売では、あまりにも急激な値上げとなり、売れるものも売れない状態となり、「しばらく待つ」トルコ国民に強いられたことはそれのみだった。

しかし、今までの経験から、たとえこの混乱が落ち着いたとしても、決して危機前の六〇万トルコリラ代に下がるはずがないことを国民は知っていた。そもそも、ここ三〇年ずっと続いた高インフレの中、今年になってドルが変動しなかったことが、おかしかっただけで、通常にもどったのだ。

二二日から危機対策として、政府は為替政策を「変動相場制（Dalgalı Kur Sistemi）」に移行した。しかし、市場の混乱の中、ドルは波（ダルガ）（Dalga）打ち、国民の上にしぶきをかけ続けた。たった二日にして、人々の給料は半分になり、物価は倍になったのである。なす術もない国民は、この変動相場制（ダルガル・クル）に対し、「国民を馬鹿にしている！（Dalga geçiyor!）」とやり場のない怒りを口にした。

ある自営業者は、「ドルの高騰で、儲けは消えた。今年半年間タダ働きしたことになった。」と漏らした。

「翌月の初めに払うドル立ての家賃の為に貯めておいたトルコリラは、たった二日で価値が半減した。また月末までに残りを貯めなくてはならなくなった。」という在イスタンブル邦人もいた。

スーパー大臣（バカン）ドクター・デルヴィシュ

エジェヴィット首相をはじめとする第五七代連立内閣が、周囲の激しい非難に立ち向かい、「この混乱を収拾する責任がある」と内閣続行を強調したのに対し、危機発生から五日たった二四日土曜日、今回の経済危機を回避できなかったことを理由にトルコ中央銀行のガーズィ・エルチェル総裁が辞任を表明した。

中央銀行総裁の後任として名が上がったのが、当時世界銀行の貧困減少経済管理部門の副長官であったケマル・デルヴィシュであった。

世界銀行に二二年間勤務した経済学者。世界銀行の副長官。前プリンストン大学教授。かつてのエジェヴィットの経済顧問。この重大時の人選に、周囲を説得させる為のデルヴィシュの釣書きは満点であった。

国民は両手放しで彼を大歓迎し、「救世主」と崇めた。

彼の名は、国内・国外の経済市場を納得させるにも申し分のなく、「デルヴィシュの名前でさえ十分」と言われたほど、「経済担当国務大臣候補デルヴィシュ」の発表と共に、市場は一気に好転の気配を見せ始めた。

メディアは、デルヴィシュがオスマン朝の総督（パシャ）の六代目にあたること、妻はアメリカ人で、再婚であること等、次々に彼のことを書き立てた。デルヴィシュは、この異様なまでのトルコメディアの関心に驚きを隠せず、「私なんかに構ってないで、他の仕事をしたらどうかい」と微笑んだ。

彼は変わっていた。彼のなすこと

Derviş kimdir ?　デルヴィシュとは誰か

ケマル・デルヴィシュは、イスタンブルの由緒ある裕福な家庭に生まれた。現在54歳。父はトルコ人。母はドイツ人。初、中等教育をイスタンブルで終えた後、フランスで高等教育を受けた。その後ロンドン・スクール・オブ・エコノミーで学び、アメリカのプリンストン大学で、修士・博士過程を修了した。1973年から３年間、中東工科大学で教鞭をとる傍ら、当時CHP党首であったエジェヴィットの経済顧問を務め、1978年に世界銀行へ入った。1980年代故トゥルグット・オザルのトルコへの呼び寄せには応じず、1994年ジェム・ボイネルの政党設立に加わったことで、再び名を広めたが、世界銀行に留まった。

ジョギングの途中、タクシーの運転手にチャイ（紅茶）に誘われ、歓談しながら、国民の声に耳を傾けるデルヴィシュ。（2001.04.18. Hürriyet 紙）

全てが、トルコには新鮮で、彼は格好のメディアの対象となった。

テレビの画面で会議から会議へ走り回るデルヴィシュを見るうちに、トルコ国民はいつの間にか、「大臣は偉そうなもの」「大臣は笑わないもの」というイメージを持たされていたことに気が付き始めた。

デルヴィシュは、忙しい中、報道陣の質問にもにこやかに対応し、二二年もアメリカで生活しているにも関わらず、非常に上品で正しいトルコ語を話した。その落ち着いた物腰と、正確なトルコ語は、外国から駆けつけた医者の腕を信じさせるに十分だった。国民は疑うことなく、手術台に身を横たえた。当然のごとく、デルヴィシュの人気は、うなぎのぼりで急上昇した。

当初、「中央銀行総裁の後任」として、アメリカから呼び戻されたデルヴィシュだったが、彼は、それだけの役職では納得せず、最終的に、財務庁、中央銀行、資本市場協議会、ズィラアト国営銀行、ハルク国営銀行、トルコ開発銀行の上級監督権を持った経済担当の国務大臣としての職を引き受けた。スーパー大臣（バカン）の誕生である。

犠牲祭を目の前にした三月二日デルヴィシュが正式に経済担当国務大臣に任命されると、翌日三日、銀行調整監視機構（Bankacılık Düzenleme ve Denetleme Kurulu）の総裁ゼケリヤ・テミズエルは、「国家に一日たりとも奉仕していない（閣僚出身でない）人物の下では働かない。」と辞任を表明。エジェヴィットの説得にも耳を貸さず、すぐに家族のいるドイツへ飛んでしまった。彼は、昨年九月に同機構が設立されて以来、トルコ銀行部門の改革に貢献していた。その貢献に対して評価が高かっただけに、今回の彼の行動には世間も驚いた。

内閣は、大きな痛手を受けた経済危機を乗り切る為に、最善の人選をし、国民を満足させ、何とか窮地を脱した。

国家大改造

そこまでは良かった。

「国民一人、一人が皆、それぞれの任務を果たさなければならない。」と述べる国務大臣デルヴィシュに、頭を縦に振り、拍手を送っていた国会議員達であったが、デルヴィシュが打ち出した、「借金を返す為に、借金をするのでなく、倹約することで国内から資金をしぼり出そう。」とする対策によって、倹約が国会にまで及ぶと、顔色を変える者も出てきた。

最新メルセデスを含む二万五千台の公用車や、議員の高級公務社宅が売却されることになった。予想はしていたが、次々にメディアで発表される国会議員の贅沢ぶりに、国民は開いた口をふさげず、またしてもデルヴィシュに拍手を送った。

改革の実施が、自分の職を失うことになると知りつつ、署名する潔い公務員もいれば、「車ごときで、国が救えるものか」とデルヴィシュの政策に不満を表わし、政府の送迎車を拒否して、私物の超高級車で国会に乗り付ける議員も出てきた。

「経済と政治を切り離すこと」「現状脱出の為には政府の協力なしには不可能であること」デルヴィシュは機会あるごとに強調し続けているが、数々の障害に、「もしも改革が私の思うようにすすめられないのなら辞職する」といともあっさり公言している。

赤信号で止まり、夫婦共々スーパーに出かけて、買い物をする大統領。

Tシャツに短パンでジョギングし、タクシーの運転手とチャイを飲みながら歓談するスーパー大臣。

彼らが国民の人気を集めるのも当然である。もう、逃げ道はない。長く続いた権威主義をくつがえし、トルコの新しい時代への移行が始まった。

（二〇〇一年四月三〇日現在）